

第 2 回検討会以降の主な指摘事項と対応状況

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
1	概要 (SPM)	全体	—	SPM にするのか概要版にするのかで位置づけが違う。概要版ではなかったか。	委員 (第 2 回検討会)	検討会名で公表する、「生物多様性及び生態系サービスの総合評価 2021 概要 (政策決定者向け要約)」とした。
2	概要 (SPM)	全体	—	編集方針として今後どうしていくのか。より重要な議論は、ここでどのようなメッセージを出すのかということだと思う。執筆側もそこを分かっていないといけない。普及版の方がその議論がやりやすい状態になっているのか。議論の手順が気になる。	委員 (第 2 回検討会)	
3	概要 (SPM)	全体	—	普及版と呼んでいるが、英語で書くとうなるか、Summary Edition か。短いバージョンを作る意味としては、一般市民に現状を伝えること、海外に対して日本は生物多様性にどう対処していくかを示せることの二つがある。これまでの JBO は、やっているのにほとんど情報が出ていなかった。検討会として独立しているが、SPM は出せるのか。環境省と一体だと SPM とは言えなくなる。	委員 (第 2 回検討会)	
4	概要 (SPM)	全体	—	普及版の位置づけについては、次の会議でよいので議論したい。例えば、1 ページ目に著者などなく、現時点では環境省レポートになっているところなど。これは中静レポートでもよいくらい。	委員 (第 2 回検討会)	
5	概要 (SPM)	全体	—	SPM とするなら検討会名で出したほうがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	
6	概要 (SPM)	全体	—	情報の確かさについても記載が必要ではないか。	委員 (編集会合)	トレンド評価の情報量 (○が点線かどうか) に基づいて、1-A~D に表記した。
7	概要 (SPM)	全体	—	⇒IPBES と同様の形式で行うのは難しいので、Expert Judge に基づく形でよいのではないか。	委員 (編集会合)	
8	概要 (SPM)	全体	—	⇒Expert Judge に基づくのであれば、IPBES とは異なる表現を使った方がよい。	委員 (編集会合)	
9	概要 (SPM)	全体	—	⇒トレンド表の○が点線かどうかを本文と紐づけるのが良いと思われる。	委員 (編集会合)	SPM を本文の章立てでセクション分けし、キーメッセージと根拠を関連付けて整理した。
10	概要 (SPM)	全体	—	SPM の内容が本文のエッセンスであることが分かるようにするとよい。	委員 (編集会合)	
11	概要 (SPM)	全体	—	⇒セクション番号レベルで本文との紐づけは行うべきではないか。	委員 (編集会合)	→SPM 及び本文公表後に、一般向けの概要版作成については検討する。
12	概要 (SPM)	全体	—	SPM は一般国民向けとしても位置付けるべきではないか。	委員 (編集会合)	
13	概要 (SPM)	全体	—	⇒別途一般向け Brochure が必要になるのではないか。	委員 (編集会合)	巻頭言で座長からのメッセージを入れることとする。
14	概要 (SPM)	全体	—	表紙と目次の間に、小泉大臣や座長からの巻頭言を入れるのか。	委員 (編集会合)	
15	概要 (SPM)	全体	—	今の記載だと、間接要因が何を意味するのかが分かりづらい。	座長 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、評価枠組みの中で間接要因が何かを丁寧に説明した。
16	概要 (SPM)	全体	—	評価枠組みについてはキーメッセージの前にあった方がよいのではないか。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、評価枠組みをキーメッセージの前に移動した。
17	概要 (SPM)	全体	—	p.6 の下部に、過去と将来両方を見るということが分かるように、タイムフレームを入れたほうが良いと思われる。	委員 (編集会合)	評価枠組み説明の中で対応した。
18	概要 (SPM)	全体	—	現在の SPM は 2 部構成になっているが、過去・現在・将来が混じっていてわかりづらいところがあるので、整理が必要ではないか。	事務局 (編集会合)	構成は変えず、キーメッセージの中でどのタイムフレームについて言及しているかを記載した。
19	概要 (SPM)	全体	—	JBO2 から大きく変わったポイントが分かるような記載があるとよいのではないか。社会状況 (生物多様性に関する戦略の変化) も併せて記載されているとよい。	委員 (編集会合)	SPM は JBO としては初めて出すものであるため、JBO 以降の経緯等については含めないこととした。
20	概要 (SPM)	全体	—	SPM の分量としてはコンパクトになった方がよい。	委員 (WG)	ご指摘を踏まえて編集した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
21	概要 (SPM)	全体	—	今後、政治的な判断なども含まれた具体的な施策が世の中に反映されていくようになると思いますが、そのときに科学的な評価に基づき判断したことが分かる図表 (素人でも参照しやすい図表) があればよいように思います。	有識者 (有識者意見照会)	図 1 に各セクションにおける評価方法を記載し、科学的な評価に基づき判断することが分かる内容とした。
22	概要 (SPM)	はじめに	—	生物多様性がなぜ大事なのか、という記載も記載できるとよい。	事務局 (第 2 回検討会)	「はじめに」の記載を拡充した。
23	概要 (SPM)	評価枠組み	—	第 1～第 4 の危機等の用語については、冒頭で説明するなり、後ろで説明すると記載するなりした方がよい。	委員 (編集会合)	脚注として補足資料で説明していることを記載した。
24	概要 (SPM)	評価枠組み	—	p.6 の図について、間接要因⇒生態系サービスのパスを記載しない理由はあるか。	委員 (編集会合)	本評価の対象ではないことを注記した上で、図 1 に矢印を追加した。
25	概要 (SPM)	評価枠組み	—	p.6 の図に対応するセクション番号を入れてはどうか。	委員 (編集会合)	図 1 にセクション番号を追加した。
26	概要 (SPM)	評価枠組み	—	評価枠組みについては、p.6 の図も使いつつ、評価枠組みは IPBES に沿っており、それは補足資料に書いてあると記載しては。	事務局 (編集会合)	本文中に附属資料の参照を追記した。
27	概要 (SPM)	評価枠組み	—	価値観と行動は他の間接要因の背後にあるということは示したほうがよいのではないか。	事務局 (編集会合)	図 1 及び本文中で記載した。
28	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	構成として 1 が直接要因、2 が間接要因について言及しているということが明示的ではない。社会経済的要因・社会経済的な変化・間接要因が文言として混在している。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、キーメッセージにおいて何について言及しているかを明示した。
29	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	1-E までは直接要因までについて記載しているということがより明確になるとよい。1-E に社会全体云々と書かれているが、2 以降のストーリーと接続するように書いた方がよい。	委員 (編集会合)	また、社会経済に関する文言は「間接要因」で統一した。
30	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	直接要因までの議論を行っていることを 1-E のキーメッセージとして入れた方がよい。	委員 (編集会合)	
31	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	各キーメッセージにも見出しがあったほうがよいのではないか。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえて見出しを追加した。
32	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	キーメッセージの上に「これからこういうことを話す」ということを示すとわかりやすい。	委員 (編集会合)	評価枠組みの中で説明した。
33	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	社会的な動きとの紐づけを行うべきではないか。例えば、物質的な豊かさは向上したが、その一方で生物多様性の損失が進んだといったことや、バブル経済の崩壊が生物多様性の状態変化をもたらしたといった形で、リンクが書けるとよい。	委員 (編集会合)	ご指摘の点については、1 の前文及び 1-B、2-B の間接要因の項に記載した。
34	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	COVID-19 の話を入れるべきではないか。読み手としては、生態系との関係に興味を持っていると思うので、科学的根拠は少ないと思うが、キーメッセージの最後の方に入れてもらえるとよい。人獣共通感染症についても、COVID-19 で初めて聞いたという人も多いだろう。GBO5 では COVID-19 の話も入っている。	委員 (編集会合)	1-B のディスプレイサービスの項に人獣共通感染症について記載した。
35	概要 (SPM)	キーメッセージ	—	地域資源やディスプレイの話も 1-E (現在の 1-F) にも対応させるべきではないか。その方がストーリーが分かりやすくなる。	委員 (編集会合)	記載内容を拡充した。
36	概要 (SPM)	根拠	全体	根拠パートのキーメッセージ部分には手法や区分に関する記載は不要だろう。	委員 (編集会合)	ご指摘の通りに削除した。
37	概要 (SPM)	根拠	全体	「近年」という箇所は時期を明確化した方がよい。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、具体的な期間・時期の記載とした。
38	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	1-A について、雑木林は二次林の一部なので、「二次林から雑木林」というのは書き方としておかしい。根拠と合わせて確認頂きたい。	委員 (編集会合)	根拠資料を確認の上、文言を修正した。
39	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	モザイク性については「懸念」ではなく、すでに顕在化している可能性がある。(里山指数 INDEX 等)	委員 (編集会合)	根拠資料が確認できなかったため、「懸念」の記載に留めた。
40	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	1-A について、「沖縄県石垣島周辺等」という記載が気にかかる。白化減少は石垣島周辺だけで生じるわけではない。石西礁湖周辺を言うのであれば「竹富島周辺」とするのがよい。	委員 (編集会合)	ご指摘の通りに修正した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
41	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	1-A については状態を書く場所だと思うが、一部混在している。状態に関する記載を先に出して、という形で強弱付けたほうがいい。1-A で取り上げたものは 1-C でも取り上げるといった形で、メリハリと整合性が必要ではないか。例えば、赤潮は 1-A では取り上げられているが、1-C では記載されていない。マイクロプラスチックのような知見が確立していないものは、1-C の方で書くといった形でよいのではないか。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、整合性を確認の上、不足しているものについては記載を追加した。
42	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	(8 pages 1-A-a)農地生態系の研究が専門ですので、本項目の農地に関する記述についてコメントいたしますが、現状では、放棄の問題が大規模な平野部で問題だとされていますが、本州では比較的小規模な水田(中山間地の棚田)で放棄が進行し(根拠論文 1)、それによる多様性(絶滅危惧種の多様性も含む)の減少が顕在化しています(根拠論文 2-6)。この場合モザイク性の喪失だけでなく、ここの生態系要素(例えば今回論文を紹介しているのは畦や採草地といった半自然草地自体)の消失・劣化が問題になっています。	有識者(有識者意見照会)	モザイク性消失の要因の一つとして、里地里山を構成する小規模水田等の生態系要素の喪失・劣化が進行したことを記載した。
43	概要 (SPM)	根拠	1-A (生物多様性)	また、国の事業ゆえに指摘しづらいのかもしれませんが、圃場整備事業による生物多様性(植物や昆虫類、鳥類、特に植物では絶滅危惧種)の減少が起こっていますので、圃場整備事業の功罪については触れられるべきだと感じております(根拠論文 3-5)。根拠となる研究事例は、下にあげます。中山間地では、農地の絶滅危惧植物種、採草地の絶滅危惧植物・昆虫種に関しては放棄および圃場整備・人工草地化等の集約的利用で顕著に減少しています。	有識者(有識者意見照会)	ご指摘を踏まえ、ほ場整備による生物の減少について 1-A-a に記載した。
44	概要 (SPM)	根拠	1-B (生態系サービス)	1-B について。表と説明が上手く噛み合っていない。20 年前を一区切りにしてトレンドが変わっているものもあるので、そこがキーメッセージに入ってくるとよい。そうすると、バブル前後が転換点になっていることが浮き彫りになるのではないか。	委員 (編集会合)	バブル経済が転換点になっていることを 1-F で言及し、個別のトピックについては根拠本文中で 20 年前を境にした変化について記載した。
45	概要 (SPM)	根拠	1-B (生態系サービス)	1-B に漁獲圧の話があるが、1-A に記載がない。IPBES でも海洋の損失要因として大きく取り扱われている。	事務局 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、1-A のキーメッセージ及び根拠に漁獲圧の話として海面漁業の漁獲量の変化を記載した。
46	概要 (SPM)	根拠	1-B (生態系サービス)	1-B-a について、供給サービスの海外依存はもっと上の方に書いてもよいのではないか。食の選択肢は増えていることは事実だが、国内の生産はこうなっているという流れになっていると分かりやすい。木材の話も同様。何を主張したいのか、という点で前後関係を考えた方がよい。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、1-B-a の前半に海外依存に関する話を移動した。
47	概要 (SPM)	根拠	1-B (生態系サービス)	・食料の供給サービス (10 ページ目 1-Ba) について、海面漁業の漁獲量がピーク時の 50% 程度まで減少したという、水産業に特化した記述があります。 これに対する需要側の状況としては、「海外からの輸入増加等により、国内で生産可能な資源の約 3.1 倍を海外に依存している」という記述がありますが、これは供給サービス全体について、しかも現時点における静的な状況の記述であり、供給側が個別・時系列的な記述になっていることと整合性がありません。 例えば、水産物の需要に特化した時系列的な評価として、水産庁が令和元年の水産白書で「水産の動向」という記述を掲載しています (https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/r01_h/trend/1/t1_f1_3.html)。 これを見ると、令和元年における日本の 1 人 1 年あたり食用魚介留意消費量(粗食料ベース)はピーク時の 66%に減少しているため、「食糧供給サービスの需給比」で見るとそこまで大きな減少はしていないことになってしまいます。 一方、食料として以外の利用や海外輸出も含めた水産物の自給率の変遷は、平成 28 年水産白書の「水産物需給の動向」で記載されていますが (https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29_h/trend/1/t1_2_4_1.html)、 この指標で見れば、平成 28 の水産物自給率は、海面漁業生産がピークであった 1985 年の 65%まで低下しているため、海面漁業の漁獲量の変遷と整合性が出てきます。	有識者(有識者意見照会)	ご指摘を踏まえ、需要側の変化として自給率の変化に言及した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
				具体的にどういった指標を用いるかはお任せしますが、個別に供給量の変化を記述するのであれば、対応する需要の変化についても個別に変化の記載をするべきだと思います（あるいは、両者を併せた需給率の変化として記載するか） 私は海洋が専門なので水産物について御指摘しましたが、おそらく農産物や木材についても同じ事が言えると思いますので、ご検討下さい。		
48	概要（SPM）	根拠	1-B（生態系サービス）	195頁からの第5章を中心に「生態系ディスサービス」に関して説明があります。興味を持って拝読させて頂きました。第5章の前にも生態系ディスサービスが記載されている箇所は何か所もありますが、特にこの第5章では大型哺乳類と昆虫類による生態系ディスサービスについて提示されています。実害的な例としては、良い種選択だと感じます。 現在、本研究室では、街路樹へのムクドリ等の時の調査を実地調査、アンケートを進めてきています。都心部の一部の街路樹へ時として利用する鳥類（ムクドリなど）も実は、同様なディスサービスを受けているといえるのご存じの通りです。逆に、これらの鳥類によって、害虫の採餌などによる「良い面でのサービス」、すなわち生態系サービスを受けていることも事実ですが、排泄物や鳴き声といった、負の面としてのディスサービスの方が目立ちます。ここでぜひお願いしたいのは、ディスサービスで被害を受けるだけでなく、正の部分のサービスも受けることがあり、そのバランスが大きな問題点になっている点です。一部の被害が目立ちやすい鳥獣にターゲットを当てると、負のイメージが余りにも多くなるのではと感じますし、「クマ、シカ＝ディスサービス」ということに成らないかと思います。 もう少し、サービスとディスサービスが表裏一体である旨、どこかで記述してくれると幸いです。	有識者（有識者意見照会）	ご指摘を踏まえ、生態系がもたらすものとして正負両面の影響があることを記載した。
49	概要（SPM）	根拠	1-C（直接要因）	1-Cの第4の危機に関する記述として、海洋酸性化の話は入れるべきではないか。	委員（編集会合）	ご指摘を踏まえ、1-C-dに海洋酸性化の話を追記した。
50	概要（SPM）	根拠	1-C（直接要因）	第2の危機については、国環研でレポートを出したので参照いただければと思う。	委員（編集会合）	1-C-bに根拠情報として追記した。
51	概要（SPM）	根拠	1-C（直接要因）	(13 pages 1-C-a)ここでは農地面積の減少が問題とされていますが、同時に集約的土地利用をすすめた圃場整備事業の拡大も取り上げるべきです(根拠論文3-5)。水田はまだ比較的広く残っていますが、圃場整備後の環境や生態系は、以前のものと大きく異なります。	有識者（有識者意見照会）	ほ場整備の影響については1-A-aで取り上げているため1-Cでは取り上げないこととしたが、開発・改変によって規模だけでなく「質」の変化が生じていることを追記した。
52	概要（SPM）	根拠	1-C（直接要因）	地球環境変化の影響（13ページ目、1-Cd）について、「海面水温の上昇や酸性化による海洋・沿岸の生物への影響は既に発現している」という記述があります。 先行して環境省から公開されている「気候変動影響評価報告書」では、総説、詳細版ともに海洋酸性化の影響については「将来顕れる可能性が高い」という形で言及しており、現時点で酸性化の影響が生じているとはどこにも記載されておりません（むしろ、貝類については「酸性化の影響は現時点では報告されていない」と明記している）。 私は気候変動影響評価報告書の海洋部分の検討委員でしたが、検討の過程でも「既に酸性化の影響が発現している」と断定できる事例は国内でまだ一つもない事を確認しています。 本報告書で「既に酸性化の影響が発現している」と記述した科学的根拠は何でしょうか？	有識者（有識者意見照会）	気候変動に伴う海洋の酸性化や貧酸素化による影響も懸念されていることを1-C-dに追記した。
53	概要（SPM）	根拠	1-C（直接要因）	地球環境変化の影響（13ページ目、1-Cd）について、酸性化の将来的な影響について言及するのであれば、酸性化よりも早い時期に影響が発現すると考えられている海洋貧酸素化の	有識者（有識者意見照会）	

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
				将来的な影響についても記載するべきであると思います。上記の「気候変動影響評価報告書」でも、海洋貧酸素化の影響について繰り返し言及しています。		
54	概要 (SPM)	根拠	1-D (対策)	1-B-d との関連で、1-D の方に伝統知に関する対策 (伝統野菜の認証等) の話が対応付けとして入っていてもよいか。エコツーリズムも同様。1-A・B を 1-D が受けられているかが重要ではないか。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、整合性を確認の上、対策に関する記載として 1-D-b に不足しているものを追記した。
55	概要 (SPM)	根拠	1-D (対策)	1-D は全体的に 00 年代以降の話メインだが、それでよいのか。環境に関する政策は 90 年から法制化が見られていることに加え、環境省が出来た前後で環境立法が進んだ。2000 年代より前にもメジャーな変化のポイントはあったと認識している。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、1-D の各項で各危機への対策について 00 年以前の内容も追記した。
56	概要 (SPM)	根拠	1-D (対策)	1-D に関して、生物多様性・生態系サービスの概念が出てきて、希少種・保護区レベルの対策から遍く土地利用の議論に移っているなど、横断的な取り組みが求められてきている、様々な問題に波及しているという状態になっているが、現状では全体的に環境省の話になっている。	委員 (編集会合)	環境省以外の省庁やセクターに関する議論については、社会変革との関連で 2-C の社会変革に向けた総括と今後の課題に記載した。
57	概要 (SPM)	根拠	1-E (将来シナリオ)	2-A-b (編集会合時点) は生態系サービスの話が多いが、生物多様性との関連が分かりやすい様になっているとよいのではないか。	委員 (編集会合)	生物多様性関係の情報について、PANCES 関係の先生方にインプット頂くこととした。
58	概要 (SPM)	根拠	1-E (将来シナリオ)	2-A (編集会合時点) で集中・分散、自然資本・人口資本という話が分かりづらいのではないか。	委員 (編集会合)	図 5 に集中・分散、自然資本・人口資本についての説明を追記した。
59	概要 (SPM)	根拠	1-E (将来シナリオ)	2-A (編集会合時点) のシナリオ分析は、社会がどちらの方向に向くかによって、生態系の状態が変わりうるということが重要なポイントであり、その中でも大きな影響を与えるものとして、人口分布と資本選好があるということがこれまでの研究で分かった、ということが重要である。	委員 (編集会合)	ご指摘の内容を追記した。
60	概要 (SPM)	根拠	1-F(成果と課題)	1-E (編集会合時点) はなぜ社会変革が必要かの危機感が伝わるような文章になればよい。これまでの様々な対策にもかかわらず、生物多様性は回復してない、という切迫感がない。まとめてして見えてきた危機感があぶりだされているとよい。	委員 (編集会合)	直接要因のトレンドに言及しつつ、現状の対策では不十分であるということ強く打ち出す形での記述とした。
61	概要 (SPM)	根拠	1-F(成果と課題)	第 1~4 の危機への対策ではそれを回復させることは難しい、ということを示してもよいのではないか。	委員 (編集会合)	
62	概要 (SPM)	根拠	1-F(成果と課題)	p.20 でずっと増大傾向になっているようなものを挙げて、その背景として社会的な要因があるので社会変革が必要だ、ということを示すとうまく匂わせられるとよい。	委員 (編集会合)	
63	概要 (SPM)	根拠	1-F(成果と課題)	生態系サービスについては、行動様式、ふるまい等、社会というところが大きく関連していることも見えてきたということを示す 1-E-a 等に入れられるとよい。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、生態系サービスと間接要因の関連性をキーマッセージ 1 の前文や根拠 1-F-d に記載した。
64	概要 (SPM)	根拠	2	2 の冒頭の文章について、ここで何を言いたいのかを明確にしたほうがよい。将来予測ができるようになったということ、その予測に基づいたらこうだった、ということ、そして間接要因の分析結果として、こうだった、ということが記載されているべきである。今はあまりサマリーになっていない様に感じる。	委員 (編集会合)	ご指摘も踏まえつつ、2 冒頭のメッセージとしては「今後、生物多様性の損失を止め、回復へと転じさせるためには、間接要因への対処を通じた社会変革が不可欠である。」とした。
65	概要 (SPM)	根拠	2-A (間接要因)	2-B (編集会合時点) については、10 の小区分にまとめるよりは重要なものに特化して議論していくという形で、元々のアンケートに基づいて議論したほうがよい。	委員 (編集会合)	ご指摘を踏まえ、アンケートに使用した項目での記載を行った。
66	概要 (SPM)	根拠	2-A (間接要因)	2-B (編集会合時点) は見出しを付けたほうがよいのではないか。	委員 (編集会合)	他のセクションも含め、見出しを追加した。
67	概要 (SPM)	根拠	2-A (間接要因)	差し替えた図を使うことが読者目線で分かりやすい。一方、図 6 のヒートマップは要らないのではないか。同じ Alluvial フローの形式で示していく方が読者としては理解しやすい。	委員 (WG)	ヒートマップ図は削除し、沖積図を掲載することとした。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
68	概要 (SPM)	根拠	2-A (間接要因)	SPM の 23 頁の b では全般に効くもの、c では個別に効くものについてとのことであったが、むしろそこがキーメッセージではないか。b は 4 行目まで太字にしてもよいか。介入点も同様に書く方法もあるか。	委員 (WG)	2-A-b において、ご指摘の点を記載した。
69	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	「介入点－間接要因－直接要因」の図は、複雑性を表していると思うので、それを言うことに使ってもよいか。「直接要因により影響を与えると分析された・・・」など、ここだけ読んでもわかりやすい書き方がよい。	委員 (WG)	2-A-b において、関係の複雑性ととも、特定の直接要因と強く関係している間接要因が存在することについても記載した。
70	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	関係の複雑性を伝えることは、メッセージとして SPM には馴染まないか。特に太い線について説明することや、メッセージを伝えたいところは視覚的に強い色を使うなどはどうか。	委員 (WG)	
71	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	介入点と間接要因の関係を淡々と描くよりは、直接要因についても書いた方がよい。また、組み合わせの重要性も言えるとよい。	委員 (WG)	図 7 の「介入点－間接要因－直接要因」の図を採用し、一つのセクション (2-A) で直接要因から介入点までの関係性を扱うこととした。
72	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	直接要因をどのように変えられるかを中心にした方が分かりやすい。直接要因にはいろいろな間接要因が関わっていることが言えるのは重要。例えば、エネルギー利用の効果は明確で、そこに関わる介入点も明確だということも言えるとよい。そのような具体的な話にもっていった方が分かりやすいのではない。	委員 (WG)	
73	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	まずは図の見方を説明した上で、直接要因をベースにおいて介入点と間接要因の関係性を具体的に述べた方がよい。	委員 (WG)	
74	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	33 頁の表も、30 頁の図との関係性を踏まえて整理したほうが全体の流れとしてよい。この図と関連させて具体的な施策を取り上げ、表の右に有効的にきく直接要因を記載するなどはどうか。	委員 (WG)	ご指摘を踏まえ、表 1 を整理した。
75	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	図の中の直接要因がカテゴライズされている危機も記載しておくとい。	委員 (WG)	ご指摘の通りに図 7 に追記した。
76	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	図について、D1～8 について大きさや種類も違う中で、地球規模評価報告書では直接要因として一番 D1 が大きいというように、今後 D1 を大きくして他を小さくなどはできるのか。	事務局 (WG)	→トレンドや過去のインパクトの情報などを定量的に掲載した上で、影響の大きさを示しているため、現状としてでは難しく、今後のテーマになると考えられる。
77	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	→どの直接要因がどの危機を招いているのかを聞いたものがあればできるのではない。前半に緊急度やトレンドがあるので、それを入れた形で考えることはできるが、生物多様性として考えた上でどれが重要であるかはやっていないか。	委員 (WG)	
78	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	→生態系別に影響も違うことを考えると、無理に全国一律の表現をすることは避けた方がよい。	委員 (WG)	
79	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	→アンケートのやり直しが必要となるが、生態系サービスの経済的な影響を持ってくると、影響の大きさについて言及することはできるかもしれない。	委員 (WG)	
80	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	先日の打合せで、アンケートで評価点は低かった間接要因で大事なものもあるという話はどうなったか。	委員 (WG)	→アンケートの聞き方については、過去から現在までのインパクトか将来を含めたインパクトかには限定していなかった。調査方法については、今後の参考とさせていただきます。
81	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	回答者の知識にもより、アンケートのやり方についても改良の余地はある。	委員 (WG)	
82	概要 (SPM)	根拠	2-B (社会変革)	出発点は調査の方法に由来するので、本文でどのような性質の結果であるのかを踏まえた方がよい。	委員 (WG)	アンケート調査の性質を 2-A-a に記載した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
83	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	2-C の有効な介入点と施策の対応については、件数まで SPM で記載する必要はないのではないか。定性的なレベルでの記載でよいと思われる。	事務局 (編集会合)	吉田委員にご協力いただいて介入点等の分析を実施し、分析方法についてワーキンググループを開催して議論した。
84	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	「不平等の是正」みたいな話を国家戦略から機械的に拾ってくるのは難しいように思う。また、不平等の是正と保全における正義と包摂～については国家戦略でもなじみが薄いと思うので、特に間接要因との関連性が高いものについては、課題が明示的になるような形でメッセージが示せるとよい。	委員 (編集会合)	
85	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	アンケート結果を主成分分析に掛けると、まとまりが出てくるのではないかと。間接要因同士の関連性と有効なレバレッジポイントについても同様に分析が出来るのでは。外来種とかは別にレバレッジポイント関係ない、産業構造にとって有効なレバレッジポイントはないといった議論が出来る様になると思われる。	委員 (編集会合)	
86	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	主成分分析をすると、同じような直接要因に働きかける複数の間接要因が見えてくる。その次のフェーズとして、複数の間接要因に働きかける政策も見えるのではないかと。	委員 (編集会合)	
87	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	2-B・C の分析部分については、それ以外の部分と Confidence term の扱いを他と切り分ける必要がある。	委員 (編集会合)	2-A-a に調査方法及び分析方針を記載した。
88	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	① 31 ページ「経済活動に係る変化」のうち、「産業構造の変化」の「良い暮らしについての多様な観念の受容」について、農林水産業の従事者が減少しているという産業構造の変化がある中で、農業の従事者をドイツのように「田園の管理者」と位置付けて処遇することで、事業と環境管理を同時に遂行していけるのではないかと。同じことは、内水面の漁業従事者を「水域の管理者」とみなして処遇することも可能。琵琶湖では、オオクチバスなどの外来魚駆除に漁業者が積極的に参加して、すでに水域の管理者としての実績を積んでいる。これは、一般的には、社会経済活動による生物多様性保全の一環とみなすことができる。 ② 上記のうち、農業従事者が農業水路の管理を灌漑目的以外に、水路のネットワークの維持管理を通じて水路と水辺の生物多様性保全に用いるという方向がある。この場合は、水路の維持管理に関わる土地改良区が灌漑用水の供給に加えて環境保全の役割を引き受けるという新たな組織改編も必要となる。これは、第一次産業における技術・組織の改革と連動する課題となる。 ③ 32 ページ「生産と消費」のうち、「消費と浪費の削減」もしくは「良い暮らしについての多様な観念の受容」について、いくつかの県ではグリーン購入ネットワークが環境配慮型商品の購入を進める運動を展開してきている。ここで、生物多様性保全を念頭にプラスチック製の包装紙やレジ袋に替えて分解性の包装紙、レジ袋を生産・流通させる事業を展開させると一つの実践例を示すことができる。	有識者 (有識者意見照会)	①及び②については、2-C-a にランドスケープ・アプローチを適用した取組を進めるにあたって一次産業従事者との連携も必要である旨を追記した。③については、p.32 「生産と消費」の「良い暮らしについての多様な観念の受容」の項に、グリーン購入法に基づく持続可能な調達を追記した。
89	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	35 ページ f に関し、社会変革を実現するためには人々の意識を変えることが重要であり、そのためには教育、特に学校教育が大変重要な手段になること、これまでの科学者中心のアプローチだけでなく、学校教員を含む教育関係者との緊密な連携を強化していくことが重要との提言を取りまとめ、2020 年 11 月に環境省に提出しました。その趣旨が上記の 35 ページ f に反映されていないので、反映されるよう、再度意見を言わせていただきます。	有識者 (有識者意見照会)	ご指摘を踏まえ、2-C-f に連携が必要なセクターとして「教育機関」を追加したほか、人々の自然に対する関心を向上させるための施策として 2-C-a に ESD を追記した。
90	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	2-D (編集会合時点) のメッセージが弱いので、社会生態系のフィードバックを PDCA として政策評価する必要があるということ、キーメッセージでしっかり書くとよい。	委員 (編集会合)	ご指摘の点を 2-C のキーメッセージ及び根拠に追記した。
91	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	生物多様性として対策が必要なポイントが示せるとよい。SDGs や気候変動の議論で行われている施策から、生物多様性の観点が抜け落ちているかどうか分かる必要があるのではないかと。今の記載は現状の対策ベースの記載になっている。	委員 (編集会合)	ご指摘の点については、2-C において記載した。
92	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	2-D (編集会合時点) から有効な施策の部分も抜け落ちてしまっており、環境省として進めたい内容が記載されている印象を受ける。b は分析に基づく有効な施策、c をクロスカッチャーの話にするといった形で、もう少し細かく区分してもよいだろう。	委員 (編集会合)	ご指摘の点については、2-C-c などで記載した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
93	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	⇒NbS や地域循環共生圏と社会変革とのリンクは明示的にした方がよい。	委員 (編集会合)	
94	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	2-D-b (編集会合時点) にどういった働きかけを行うかを詰め込んでいく必要があるだろう。例えば地域循環共生圏であれば、「良い暮らしに向けての多様な～」への介入が出来れば達成できると考えられるが、それが介入点に対する働きかけにもなるのではないか。エネルギーの観点での施策が活用できる話もできるだろう。	委員 (編集会合)	アンケートの分析結果も踏まえて、2-C に具体的な働きかけについて記載した。
95	概要 (SPM)	根拠	2-C (総括と課題)	35 ページの f で、生物多様性の回復に向けた取り組みの事例として、都道府県や市町村が策定している環境基本計画の活用が考えられる。すでに、各府県では生物多様性地域戦略を策定しているが、これは現実には策定しただけであまり活かされていない。そのため、地域戦略と環境基本計画を連動させ、環境基本計画のなかで地域戦略の内容を実践していくような環境管理の仕組みを作っていくと実効性がある。	有識者 (有識者意見照会)	2-C-f において、環境基本計画等の上位計画との連動していくことが重要であることを追記した。
96	概要 (SPM)	その他	用語集	地域循環共生圏についても用語集で説明が必要ではないか。	委員 (編集会合)	ご指摘の通りに追加した。
97	概要 (SPM)	その他	アンケート	アンケート結果については、本文の方でどういったプロセスで整理を行ったかが分かるとよい。	委員 (編集会合)	アンケート調査の概要については、2-A-a 及び附属資料に記載した。
98	本文		序章	コロナについて、災害のところで書いているが、ここ数年でガラッと変わってしまう可能性があることを序章などで書いていくとよい。	委員 (第 2 回検討会)	ご指摘を踏まえ、序章において COVID-19 の流行がもたらした変化について言及した。
99			序章	序論で急にレバレッジポイントが出てきたことはもう少し説明したほうがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	ご指摘を踏まえて対応した。
100	本文		II 章	生物多様性との関係性が見えないと、日本の社会情勢の歴史が見えるというだけになってしまふ印象がある。	委員 (第 2 回検討会)	<ul style="list-style-type: none"> ● 第 II 章の間接要因を第 IX 章の前に移動させることとした。 ● 間接要因のトレンド評価はしないこととした。 ● アンケート調査の分析結果より、直接要因と間接要因、介入点の関連性で特に強いものについて解説するとともに、この解説を補強する論文や事例等を引用し、深みのある説明を行うとともに、文脈に沿う定量情報や現在の状況を説明できる重要な情報掲載することとした。
101	本文		II 章	評価については、それでよいと思うが、矢印の向きについてはこの場で合意するのは難しいか。今後、納得できる評価にするためにどう進めるのか。	委員 (第 2 回検討会)	
102	本文		II 章	矢印判定については、今日ご意見いただけるところはいただき、よく読んでいただいた後に検討会後にもご指摘いただいて決めていくことがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	
103	本文		II 章	矢印については、直接要因と間接要因をくっつけるのはやめておいたほうが良いのではないか。研究者も判断が難しい部分なので、傾向の話でとどめておくことがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	
104	本文		II 章	矢印の示し方は、大きなカテゴリーの横に矢印が出ているので、矢印の判定に使った指標をそばに入れておいて、それが矢印にどう変換されているのかを整理したほうがよいか。統計データの増加・減少傾向を見て、例えば±10%なら横ばい、それ以上なら上・下にするなど決めてしまうのがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	
105	本文		II 章	間接要因の内容がどう直接要因にどうつながるのか、一般の人から見ても無理がある。もう少し簡潔につながりの分かる議論にまとめるべき。	委員 (第 2 回検討会)	
106	本文		II 章	評価については、矢印に影響力を入れてしまうと話が理解しづらくなるので、矢印はの間接要因のトレンドを示し、影響力は丸の色で示したらよいか。	委員 (第 2 回検討会)	
107	本文		II 章	7 ページについて、現在の傾向はどう決めたのか。トレンドと現在の傾向が異なっているので、その説明を付け加えたほうがよい。	委員 (第 2 回検討会)	
108	本文		II 章	資金フローとガバナンスなどは、あまりに間接的すぎる。 資金フローについては、生態系に関するプロジェクトが全くないので、事実と違うメッセージになってしまうのではないか。実際に生物多様性にお金が入っているところを定性的にでも示し、展望を描いたほうがよいか。	委員 (第 2 回検討会)	アンケート調査及び SPM の構成を踏まえ、本文に記載する間接要因については直接要因との関連性が比較的高いとされた項目に絞ったため、第 II 章 (現第 VIII 章) では資金フローについての項目を立てず、第 X 章で ESG 金融の促

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
				ガバナンスについては、SDGs インデックスの日本の達成状況など、SDGs に関するガバナンスの情報など入れないと読み手に分かりづらいか。 資金フローに関するインデックスを考えると、OECD のレポートを読み込まないといけない。		進等に言及するにとどめた。 ガバナンスについては、ご指摘を踏まえ SDGs インデックスの日本の達成状況を追記した。
109	本文		II章	価値観について、自然志向の人が増えている感覚もあるが、そうでない人もいまだに増えている。二極化しているところを指標でみることはできるか。	委員（第2回検討会）	「自然に対する関心」の変化を見る限り、これを裏付ける結果ではなく、参照可能な論文もなかったため、ご指摘の点は記載を見送った。
110	本文		II章	社会全般的な概要がなぜここに出てくるのかが分かりづらい。生物多様性の損失に影響を及ぼす要因に加えてこの間接要因を扱うのかの全体の概念を示すべき。間接要因をなぜ見なければいけないかというところを示したほうがよい。	委員（第2回検討会）	ご指摘の内容については、序章で対応するとともに、全体の関係性を再整理し、第II章を第IX章の前に移動して、間接要因を見ることに至るストーリーを分かりやすくした。
111	本文		II章	間接要因をどう抽出したかについて、もうすこし補足説明が必要だと思う。表 i(p.v)には後段の章・節項目番号を明記した方がよい。レバレッジ・ポイントが p.v ではじめて出てくるが、ここも補足説明がないと伝わらない。	委員（第2回検討会）	間接要因の抽出方法については、第1回検討会資料を用いて付属書に反映した。関連する章・節の明記についてはご指摘の通りに対応した。
112	本文		II章	食品ロスは全体量が減少傾向にあるとしているが、単純に人口減少に起因していると思うので、一人当たりの食品ロスで判断した方がよい。他の指標についても同様の留意が必要だと思う。	委員（第2回検討会）	本文に留意事項として記載した。
113	本文		II章	間接要因が多く、全体が見えない。なぜこのようなものを取り上げたことを示すのもよいが、事例をいくつか挙げてほしい。例えば資金フローについて、生物多様性に関してこのようなものが取り上げられたので影響が加速したなど、例を示すことで全体像をできる限り分かりやすく示してほしい。	委員（第2回検討会）	間接要因については、取り上げる項目をアンケートにおいて直接要因との関連性が比較的高いとされた項目に絞り、全体像を分かりやすくした。
114	本文		II章	いろいろな要因を分かりやすくするためには、文献でよいものがあれば使ったほうがよい。いろいろな要因が生物多様性の状態にどう影響しているのかが示されている。研究結果があれば引用されるのがよい。	委員（第2回検討会）	アンケートより、間接要因と直接要因が複雑に関係していることを示唆する結果が得られたため、これを活用し、生物多様性への影響の複雑性等について説明を加えた。
115	本文		VI章	208 ページ（3 自然環境に関する調査・モニタリング）に関して： 我が国およびアジア太平洋地域における生物多様性観測ネットワーク（Japan Biodiversity Observation Network: JBON, Asia Pacific Biodiversity Observation Network: APBON）は、2009年の発足以来、環境省の支援を受けながら、また「地球観測に関する政府間会合（GEO）」における我が国の地球観測機関等と連携しながら、生物多様性観測および能力開発等の活動を推進しています。これらの観測ネットワークによるモニタリングデータや知見は IPBES によるアジア太平洋地域アセスメント報告書にも貢献しています（62, 63, 180, 442, 502 ページ）。また科学技術・学術審議会下の第8期地球観測推進部会が取りまとめた「今後10年の我が国の地球観測の実施方針フォローアップ報告書」（2020年8月公開）においても JBON や APBON は我が国の地球観測において生態系・生物多様性分野を牽引する観測機関（大学や研究機関、研究者のネットワーク）として注目されています。以上を根拠として、第一段落最後に、『また、我が国およびアジア太平洋地域における陸上・陸水・沿岸海洋の生物多様性観測は日本およびアジア太平洋生物多様性観測ネットワークによっても推進されており、“IPBES 生物多様性と生態系サービスに関する地域評価報告書—アジアオセ	有識者（有識者意見照会）	ご指摘を踏まえ、ご提案の文章を追加した。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
				アニア地域”にも貢献している。』という主旨の文を加えることはできるでしょうか。 ※根拠論文あり		
116	本文		VIII章	PANCES では複数のモデルを使った分析をしているわけではないので、将来トレンドとして出す際にデータ自体がどういう性質を持っているのかを示しておかないと、そうなっていくのかと信じてしまう人もいます。 シナリオ分析はかなり極端な不確実性分析としてやっており、どれくらいインパクトの振れ幅があるかをやっているところなので、シナリオ分析はその説明をしておくべき。	委員（第2回検討会）	PANCES の統合版 SPM の内容も参照し、本文に記載していた「網羅的」などの文章を削除し、SPM 及び本文において PANCES シナリオに関する説明を追記するなどした。
117	本文		IX章	施策がないということは、国として施策がないものの、日本で取り組まれているわけではないので、書き方として工夫が必要か。地域での取り組みを国がどうバックアップしているのか、国家戦略と地域戦略の関係、PANCES でいう重層的ガバナンスについてどう書かれているのかなどを書く予定はあるのか。	委員（第2回検討会）	対象は現行の生物多様性国家戦略に記載されている施策とし、地方公共団体等への支援施策についても含めた。社会変革を実現するためには、生物多様性国家戦略のみならず、環境基本計画等の上位計画との連動や、地方公共団体における環境基本計画と地域戦略の連動、他分野の国や地方公共団体の各種計画等において生物多様性の
118	本文		IX章	国としていろいろやっているのに記載がないのは、ミスリードのように感じるので工夫したほうがよい。	委員（第2回検討会）	保全と生態系サービスの持続可能な利用に関する施策を位置づけるなど、間接要因への働きかけを強める必要がある。ただし、既存の他分野の施策を全て確認するにあたって対象とするか否かの判断基準が定まっていないこともあり、第IX章では扱わず、第X章において、この必要性について言及するとともに今後の課題として扱うこととした。
119	本文		IX章	第1節、第2節では、国だけでなく地域を含めて考えているのに、第3節では国について書かれているので違和感がある。冒頭に国の施策について整理することを明示してはどうか。	委員（第2回検討会）	
120	本文		IX章	他省庁の基本計画は最低限レビューすべきではないか。それが国家戦略に入っていないのは、両者の関係性が整理されていないということではよいのではないか。 農林水産省の戦略や基本計画だけでなく、国土交通省の国土形成計画、国土利用計画、社会資本整備基本計画、観光立国推進基本計画、文部科学省の教育基本計画（教育を通じた意識変化）など。	委員（第2回検討会）	
121	本文		IX章	「国家レベルでの制度・ガバナンス」を国家戦略の文書だけから施策の有無を論じるのはバランスを欠いているように思う。	委員（第2回検討会）	
122	本文		IX章	介入点以外に、ガバナンスの介入についてもそれと別に出されているが、それらは政策の基本的に概念としてやられていないのか。生物多様性の将来にとって重要であり、今後の施策のあり方の基盤になる概念であると思うので、介入も正面から取り入れたほうがよいと思う。 包括的に整理するのではなく、10年、20年で出てきた施策について整理するだけでもよいと思う。国の動きをみるうえで効果的ではないか。	委員（第2回検討会）	
123	本文		IX章	表 IX-2 は、ヒートマップの方がわかりやすい	委員（第2回検討会）	ご指摘を踏まえ、表をヒートマップとした。
124	本文		IX章	間接要因が時にトレードオフを起こすのではないか。例えば、地球温暖化への対策として再エネ利用をすると第4の危機は低下しても第1の危機は増大するなど、物事全体を見て書いていることが示しきれていないか。木材の伐採について、森林構成によっても違うので、そこを含んで介入の話をしなさいといけないのではないか。	委員（第2回検討会）	間接要因によるトレードオフについては、第X章で施策の実施にあたっての留意点として記載した。
125	本文		IX章	IX章で国家戦略の施策の有無のチェックに PANCES で作成したデータベース（いであへの外注）を使用したのであれば、それについてリファアーをすること。	委員（第2回検討会）	ご指摘の通りに、第IX章に PANCES プロジェクトでのデータ参照について追記した。
126	本文		IX章	ここで議論するのは国内の生物多様性に影響を与えている間接要因と介入点を執筆の対象としていることでよいか。 テレカップリングについても言及するのであれば、わかりやすく節の下に別途項目を設けてもよいか。	委員（第2回検討会）	生物多様性の評価については国内を対象とするが、施策等については海外に影響するものも含む方針とし、テレカップリングについては第X章でも扱った。

No	資料名	項目	章・項	内容	指摘者	作業内容等
127	本文		IX章	「第IX章 社会変革に向けて」が一番読まれるところではないか。個人として何をすればよいか、民間企業は生物多様性について何をすべきかわからないので、そこが分かるとよいか。サプライチェーンが少ししか出ていないので、読み手から見て一貫性があるストーリーがあるように、コラムでもよいが、具体的に分かる事例があるとよい。 SDGs を機に民間企業も活発に動いているので、SDGs にも配慮しつつ生物多様性に対して何をすべきかわかるとよい。	委員（第2回検討会）	SPM との整合の観点から、個人や民間の取組について IX章に新たな節は設けず、X章の中で言及した。 サプライチェーンについては、エコロジカルフットプリントを第II章でも言及しつつ、情報を追加した。
128	本文		X章	X章について、ポスト 2020 枠組みが出ているので、それを踏まえてほしい。目標が案として提示されているので、そことの整合性や国家戦略との兼ね合いなど、特に伝統知などが新しいものとして目標に入っているの、そこを入れるとよいのではないか。	委員（第2回検討会）	現段階で公表されているドラフトを参照し、X章の記述の具体化の参考とした。
129	本文		X章	表X-3 は、左に間接要因、上に直接要因がよい。	委員（第2回検討会）	ご指摘のとおり修正した。
130	本文		X章	X章について、JBO2 での課題のどこを削除されたのかは示してほしい。完全に解決されるものはない。統一的なフォーマットでの調査の必要性など、新しい課題が残っていないかは研究者に確認するなどをする場を設けてもよいか。他に情報ソースがあればヒアリングしてもらってもよい。	委員（第2回検討会）	削除していた内容も含めて、第X章の記載を再考した。
131	本文		X章	Nbs は使う人によって定義が異なっているので、そこを明確にして話をしたほうがよい。	委員（第2回検討会）	IUCN の global standard も参考にし、Nbs の定義を明示した。
132			X章	Nbs について、IUCN から今年 global standard が公表されているので参考になる。 https://www.iucn.org/theme/nature-based-solutions/resources/iucn-global-standard-nbs	委員（第2回検討会）	
133	本文		X章	地域循環共生圏は第X章のコンテキストに沿った概念だが、その他の施策で第X章に合うものがあれば挙げておいたほうがよい。	委員（第2回検討会）	ご指摘を踏まえ、第X章で扱う内容を拡充した。
134	本文		X章	優良事例、こう展開すると地域でよい効果が起きているというものをコラムとして入れていただけるとよい。	委員（第2回検討会）	優良事例については、本文中にて紹介する形とした。
135	本文		X章	具体的に社会変革を起こすためにどのような行動を起こしたらよいかを整理したほうがよい。最後の出口がワーケーションの話になっているが、今まで上でやってきたことから、今現在のコロナの話とワーケーションの話につながりづらい。209 ページ以降もややこしい。言葉はビッグワードであるが、例えば消費と廃棄の総量の削減や、地域循環共生圏という曖昧な言葉が入ってきたりなど。読んで分かりやすい内容であるものがふさわしいか。	委員（第2回検討会）	ポスト 2020 枠組みのドラフトの内容及び第IX章での記述内容も踏まえて、具体的な行動を含めて記載した。
136	本文		X章	PANCES で抽出した政策オプションのうち、国家戦略の施策と重なり合わないものがある。PANCES のメッセージとして整理しており、それもうまく活用していただけたらよい。	委員（第2回検討会）	第X章の検討において、参考とした。
137	本文		X章	ブルーエコノミーやグリーンエコノミーなどが世界的トレンドになっている。G20 大阪サミットではブルーオーシャンビジョンを出し、そこで地域循環共生圏を出しているの、そこについて具体的記述をリファーされるとよい。ブルーエコノミーが多様性や社会変革に対してどのような効用があるのかは、UNEP が報告書を出しているの、参照してほしい。	委員（第2回検討会）	ご指摘の内容について追記した。 (Sustainable Blue Economy Finance Initiative : https://www.unepfi.org/wordpress/wp-content/uploads/2020/06/Sustainable-Blue-Economy-Brochure.pdf)
138	その他	—	—	言葉で気になったのが地球温暖化という言葉です。 気候変動への適応についても書かれており、特に問題がなければ気候変動に統一した方がよいかと思いました。(英語では政策的・科学的文書で Global warming という言葉を使うことがほとんどないため)	委員（メール 2/17）	基本的に「気候変動」で統一し、国家戦略における第4の危機の構成要素として言及する場合にのみ「地球温暖化」とした。

※この他、第2回検討会後に頂戴したご指摘、文献等の情報はすべて反映済み